



きみは黄色いゴミ袋を見たか。

黄色いゴミ袋の中身って本当に見えないのか。

カラスの気持ちがわかりたい!

by からす新聞

第7巻第10号
通巻第82号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社
からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

御存知の方も多いかもしれないけれど、日本はアメリカではない。アラスカやハワイのようにアメリカの州の一つなのではないのである。プエルトリコやグアムのようにアメリカの領土なのでもない。
似非ラップ音楽が蔓延したり、似非ヒップホップな装束を身に纏ったり、黄色人種でありながら、白人の如き金髪茶髪、青眼緑眼にしてみたり、黒人の如き濃い褐色の肌色を目指したりする若者(中には、中高年)がうろついている国土ではあるけれども、日本はアメリカではない。米軍基地があちこちにあり、米軍人が犯罪を犯したり米軍のヘリが墜落したりしても、日本の警察というものは全くの無力ではないにせよ、ほぼ無力、情けないほどに無力であるということを報道を通じて屢々目にする。それでも、日本はアメリカではない。何時ぞや、自転車に乗っていた知人が米軍人の車に接触転倒したそうだが、運転手は両手を広げて、オー・ノーというジェスチャーを示すと何事もなかったかのように走り去ったという。沖縄の話。もつと昔には、米軍のジープを追い抜いたら、追いつけられ、車を止められ、マシンガン突き付けられたという友だちもいましたよ。こ

今日の紙面から

- 二面 ヤンヒポのエンターテイメント三昧
- 三面 ロンドンレポート
Kinky Kids 変態小僧
- 四面 からすライブラリー
CD『ザ・チャンス』

れも沖縄。そんなことがあったって、日本はアメリカではないのである。
国民の前では威張り腐って、踏ん返り返っている首相とかいう者が米国政府の言うがままに自衛隊を海外派遣したり郵政民営化したりしているけれども、いやいや、それでも、日本はアメリカではないのである。M & A だとかTOBだの何だのと、訳の判らん横文字や片仮名を並べて、アメリカ的な方法論……そして、それは往々にして極めて暴力的……を用いる輩が大手を振る始めた世知辛い世になってしまったけれど、それでも、ここはアメリカではない。日本。日本。嗚呼、日本。
若い人たちの中には、嘗て、日本がアメリカの占領下にあったということを知らない人さえいるのではないかと思うことがある。その知識は持っているても、遠い昔の歴史上の出来事に過ぎない、という感覚なのかもしれない。実際のところ、私だと、直接体験している訳ではなく、家族や知人から聞いた話、本や映画から得た知識しか持ち合わせてはいないのである。沖縄返還を報じる番組をテレビで眺めたのだから、今や遠い昔。
文化や心の豊かさに関しては別にするとし

(最終面に続く)

からす新聞は×××××
が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

ヤンヒポの エンターテインメント 三昧

平成一七年9月30日、約10ヶ月の沈黙を破り第三回Zeta主催ライブが開催されたので、その時の模様をお届けしようと思う。

場所は過去2回同様あさがやドラム。間もなく5周年を迎えるという今では界限の新名所とも言えるハコ。午後4時、じょじ伊東一家が会場入りするとの事なので立ち合いも含め地下へ降りていく。あさがやドラムは元々木材倉庫だった地下室を改造してライブハウスにしただけあり、ビルの地下にしては天井が高くブロック作りなので専用設計ではない割に音響が良い。既にオーナーのO氏が来て店を開けていたのは当然だとしても、じょじ伊東一家も集合して準備を始めていた。いつもは演芸を披露する彼等だが、今回は演奏がメインとの事。いったいどうなる事なのやら。

今回のトップバッターは「工事現場」とある飲食店の工事現場がきっかけで出来たバンド。メンバーはボーカルにじょじ伊東氏、ギ



工事現場

ターが全太氏、ドラムに長橋氏、ベースは若手のクワバラ氏とお茶目なサックスが望月氏といった構成。何せ、一曲の尺が短く、且つ、早いテンポの曲ばかりで全体の演奏時間が15分足らずという超特急なバンド。しかし味わいの深いバンドである。「工事現場」初参加のクワバラ氏もかなり頑張っていたようだ。結成当時からするとメインのメンバーも齢を重ねているが、ビジュアル的にはサックス望月氏の変化が著しいのは誰の目にも明らかである。

セカンドは毎回参加の「あさがやんず」。今回も新曲を引っさげての登場。いつもと違うのは音楽器にクラリネットのケイコ氏が参加。もちろん、古くからのメンバーである。おさらいをすると、ボーカルに古地氏、ギターに全太氏、ベースに伊藤氏、ドラムに長橋氏、管にケイコ氏といった構成。よく観ると、「工事現場」のメンバーと随分被っているのである。今回久しぶりの参加となったケイコ氏は随分苦労していたようだったが、相変わらず完成度の高いバンドである事は言うまでも無い。なんでも、あさがやドラム5周年記念ライブにゲスト出演するらしい。今回の演目には無かったが、ヤンヒポお気に入りの「猫」を是非とも記念ライブでは披露して欲しいと願って止ま



あさがやんず



じょじ&ブレンダ

やんひぽ



ない。
さて三つ目の出し物は、今回初の試みである「落語」ライブである。早い話、噺家さんをお招きして落語を披露していただくという趣向。お越し頂いたのは全太氏と懇意にされているという真打ちの「入船亭扇好」師匠と二つ目の「入船亭遊一」さん。落語の世界にはあまり詳しくないので「入船亭」がどのような一家一門で落語自体の機微を解説出来ないのはご勘弁いただくとして、噺家さんの序列についてだけ記述しておく。序列には前座、二つ目、真打ちの三段階あり、真打ちになると「師匠」と呼ばれるようになり、寄席で主任(とり)を努める権利を有するようになる。なんでも、寄席の終演者が閉幕の際に蠟燭の芯を打つ様から、真を打つ」というようになったらしい。尚、真打ち制度は江戸落語のみの制度とされていて、上方落語には現状無い制度との事。

さて、肝心の落語ライブだが、何せライブハウスの事なので、高座を作る必要がある。ピールケースを四つ組んでそれらしい布を巻き、座布団を用意した。それに噺家さんの用意した座布団カバーをかけて出来上がり。お囃子のCDも借りて出囃子を準備すれば後は演目待つのみ。出番は「遊一」さんに続き「扇好」師匠。しかし驚くのは、当り前かもしれないが、プロの噺家さんの表現力だ。座布団一枚の限られたスペースで正座したまま顔や仕草で全てを表現して行く。「枕」とよばれるつかみの部分から本題に入り「落ち」へと導いていく過程で、話の情景が鮮明に浮かんでくるのである。二つ目の遊一さんでさえも、その表現力に驚きを禁じえないのだから、真打ちの扇好師匠と来た日には、演劇の舞台を観ている程である。読者諸兄も新宿等に行けば、折角常設寄席があるのだから、是非とも生で観覧する事を強くお奨めする。何を隠そうヤンヒポはライブの明くる日「新宿・末広亭」に出向き本物を多数観てきたのだ。近いうちにその時の話でも書いてみようと思う。

さて、落語ライブの後は、Zeta主催ライブの真打ち...。なかどうかは定かではないが、じょじ伊東一家の演奏...。今回はバンド演奏での締めくくり。このセッションの曲は全てじょじ氏が手がけており、なんでも最近曲作りの楽しさが解つて来たという事らしい。さらにメンバーも最近初めて楽器を触ったばかりというから、じょじ氏が手取り足取り世話を焼いている姿は感慨深いものがある。
そんな新機軸を盛り込んだ第三回Zeta主催ライブの夜は更けていくのであった...



そんな気持ちを引きずりながらも作業所に行き、いざ何かを作り始めてひとつ気が付いた事がある。何を作りたいのかが分かってないのだ。結局は自分の問題だったのだ。どうもすっきりしないのも当たり前だ。多分、日本に帰ってからの目標がいまいちはっきりしないのが原因だろう。学校に残るにあたって、どういふ事がやりたいのかという計画書は提出し、先生とチュートリアルもやっては

事アカデミックなところとは関係なしに進められるので、凄く有り難い時間なはずなのだ。

新人のクラフト・アーティストを支援するというものが有り応募してみた。思いがけず一次審査に通り、面接までこぎ着けたものの結果は、残念。受ければ二年間の場所と資金の援助があるので、後二年はこの国にいるはずだったけれども、受からなかった物はしょうがない。これで晴れて日本に帰るのだと思うとそんなに悪い気もしない。本音を言えば、もう大分日本が恋しかったのかも知れない。

その面接やら何やらの都合もあり、今まで居た学校にもう少し残ってから帰ろうというのがある、もとの計画。それが色々手続きの問題があり、本来ならばとくに始まっているものがようやく1ヶ月遅れで学校が始まった。こちらには責任はなく、全て向こう側の都合であれこれと問題が起こる。約束は守れない、言うことは三転三転するはで散々苦労させられた。手続きでもめたからだろうが、間が空いてしまったからだろうか、そんな訳で何となく気分がシャキっとしない。本来ならば自分の好きな

これから、

キンキー・キッズ KINKY KIDS

kinky という形容詞がある。

- 1 いやらしい、性的に倒錯した
- 2 心のゆがんだ、異様な
- 3 盗品の、不正な
- 4 もつれた、ねじれた、よじれた、髪がチリチリの

現代日本のパンチ・パーマを英語では kinky permanent と言うが、そもそもは名詞 kink「縮れ」の形容詞形として、19世紀中頃あたりから特に黒人の髪を指して使われ始めたようだ。OEDの初出は1844年の新聞記事。

The Negro's hair is as kinkey as it was the day he was first introduced.

「その黒人の髪は、彼が最初に紹介された日と同じように縮れている」

それが強烈な差別意識のもとで「異様な」「不正な」になってしまった。

The car is kinky, isn't it?

「その車盗品だろ」

第二次大戦後、アメリカで公民権運動が盛り上がってくると風向きは変わり、kinky は新たに「性的倒錯」を獲得。

I'm quite normal.

Normal? You? That's a laugh. You're kinky, the same as what I am.

「僕はふつうさ」

「ふつう？あなたが？お笑いだわ。あなたは変態よ、私と同じね」

The doctor is sick / Anthony Burgess, 1960

いる。しかし、その中で作りたい物は前にすでにアイディアがあり卒業までに作れなかったもの、そして売れてしまっただけの手元がないものだけなのだ。悪く言ってしまうえば、やり残し。一度終わった事への後始末なのか。そこへ先へと進んで行く目標がないのだから余計に始末が悪い。それじゃあ、何の為に残ったのか？ そんな疑問が頭をよぎる。やっぱり、やり残したと思う事があったからだろう。

考えても分からないので、取りあえず何もやらない事にした。やり残した事や計画とは全く関係なしに、銅版を一枚切り出す。何だか無性に金槌が使いたかった。余計なことに邪魔されずに、ハンマー室の中で身体だけ動かそう。カンカンと鳴り響く音を聞きながら金槌で叩いて行けば何か分かるかもしれない。僕のものから考える前に。その先へと進む前に。この銅版が一つの形に打ち出されるころには、少しは風通しが良くなっていることを願って。

ということは、例の日本の人気アイドル・デュオの名は「変態小僧たち」であった。ではそもそも kinky kids とは何なのか、検索してみた。

たくさん出てきたのが “The Kinky Kids Parade” という曲。Paul Whiteman and His Orchestra が1925年に録音した、まさにパレードと言った楽しげで軽快な曲。Kinky Kids は黒人少年たちのことだという。

しかしやっぱり多かったのは「倒錯」系。特に BDSM = ボンデージドミナンス サドマソキズム bondage, dominance and sadomasochism 関連のサイトに頻繁に登場する。たとえば「おれ、おやじが kinky って知ってるし、やつはポルノ・コレクションのありが知ってるし、向こうもおれが kinky だって知ってんだろな。」みたいなやつ。

日本人のサイトでは、真相を知って揶揄しているものが多かったが、それと知らずに kinky と表記していたりすると、苦笑する。また英語の国の外に目を向けると、ドイツのオンライン・ショップらしきサイトに、

- ・・・ Ami Suzuki, Kinky Kids, Ringo Shina ・・・
 - インドネシアでは、
 - ・・・ buat remaja, buat penggemarnya Kinky Kids terutama Tsuyoshi ・・・
 - スロヴェニアなら、
 - ・・・ japonsk? skupina Kinky Kids coververziou ・・・
- 変態小僧たちの出番は少なくないようである。(望月)



CDs



the Chance/White Box Set

ZE RECORDS、2004年、ZERIC.CD78910

今更だ、James Chanceがよ。実のところ、そう
思わなくもなかったのだけれど...『Buy』をかけ
たら、身体が勝手に動き出して、ダンス、ダン
ス、ダンス。訳のわからぬ雄叫びが勝手に飛び出
して、ダンス、ダンス、ダンス。そうなのだ。私
たちは、こんな音楽で、フリーキー・ファンキ
ン、サンキュー・ベリマツチしていたのであつ
た、あの時代。

荻窪『Heaven』で呑んだくれ、高円寺『唐騒ぎ』で
呑んだくれ、新宿『サブマリン』で呑んだくれ、小
宮んちでも呑んだくれ、陽は昇り、陽は沈み、陽
はまた昇り、また沈み、気づいてみれば、あれか
ら四半世紀経ちましたとさ。今日も酒が美味い。

(全文)

(一面から続く)

ても、経済的な豊かさに関しては、日本は
著しく遅れを取っていたのは間違いない
し、戦後、アメリカからやってきたものの多
くが日本にはない豊かさや価値を持ってい
たのも確かである。それは、最早戦後とい
つたのである。アメリカの車や電気製品は当
時は素晴らしかった。あるいは、素晴らしいと思
われていた。ジーンズやギターだって、アメ
リカからやってきたのだった。ケンタツ
キー・フライドチキンやマクドナルドだつ
て、今でこそ、ファースト・フードあるい
は、ジャンク・フードという扱いだ、来
日当初は、決して安くはない、寧ろ、些か
取った新しい外食的産業だったのである。そ
うそう、ゴージャスなハリウッド映画も忘れ
てはいけない。幼かった私たちは、良きはわ

からないながら、何となくアメリカつてすげ
えな、というイメージを持っていたものであ
る。私よりも少し上の世代だって、あるい
は、もつと上の、完全に大人だった世代だつ
て、少なからず、同じような思いを抱いてい
たに違いない。それゆえ、日本のアメリカナ
イズがばかばか進み、日本は二十年遅れのア
メリカだね、などというばかしく自嘲的
な物言いも珍しくはなくなっていたのだろ
う。馬鹿だね。戦争で疲弊した日本がアメ
リカ経済の物質的豊かさに目が眩んだのは、致
し方ないと言えは致し方なからうけれど。
ああ、だが、御同輩諸君、昨今のアメリカ
を見てみ給えよ。アメリカ製品なんざ、日本
製のものに比べれば作りも雑で壊れやすくこ
ざんせんか。喰い物だつてろくなもんがあ
りやしない。美味かない上に、身体にも悪そ
うだ。二十年程も昔、おとぼけアメリカ人
に、日本二八立チ喰イ蕎麦トイウアリガタイ

モノガアルノニ、ドウシテまくどなるどナン
カラ食ベルンダイ、と質問されたことを思い
出す。日本人、バカデスネ、という彼の言葉
は途轍もなく正しかった。二十一世紀になつ
ても何年も経過した。そろそろ、諸君も目
を覚ませよ。アメリカの真似しているはい
じゃなからう。

サイモンとガーファンクルを聴きなが
ら、シエラファアの『まんねん』で原稿を書いてい
る。出かける時にはジーンズを履き、ライヴ
ではフェンダーを弾く。このからす新聞は
マックなしには発行不能。そうさ。未だにア
メリカには少なからず世話になっている。け
れども、それはそれ、これはこれ。アメリカ
ナイズの時代はもう終わり。さらば、アメリ
カ。

(全文)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice : +81-3-3220-0644
Facsimile : +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ

編集後記

からす新聞第七巻十号(通巻第八二号)、無
事、発行できました。
新聞に限らず、これからも新企画目白押しな
ので、みなさんの御協力をお願いいたします。
御意見・御要望をぜひぜひお寄せ下さい。
次号発行予定日は二〇〇五年十一月二十五日
です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱
烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾



中野区本町2-50-12 ドエル中野201号

03-3379-1451

